



8月 春明の子どもたち（3号）



2025. 8 副園長 榎本トミ

子どもたちは身近にいる犬や猫が大好きです。

お家に犬や猫を飼っていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか？

私の家でも、以前猫を飼っていました。少し臆病な、かわいいサバ縞のオス猫です。後から分かったことですが、この猫は、私が勤めていた幼稚園に誰かが「幼稚園ならきつと育ててくれるだろう」と、そっと置いていった子でした。

実はその前、高校生の男子生徒が、円海山で小さな段ボール箱に3匹入れられて捨てられていた子猫を見つけ、そのままにはできず3匹入った段ボール箱を大事に抱えて拾ってきたようです。そして団地の1階のベランダの下の隙間に置き、誰かに見つけてもらおうとしたようです。2～3日のうちに3匹は拾われていきましたが、そのうち1匹が戻されてしまったのです。その「戻された猫」が我が家にやってきた猫です。幼稚園では、鶏もうさぎも放し飼いにしていたため園庭に猫を置いておくことはできず、「1日だけ預かるつもり」で家に連れて帰りました。まだ、生まれて日の浅い猫でしたが、シャーシャーと警戒するような声で爪を立てるような気の強さがありました。耳が大きく、緑色の大きな瞳、額にMの模様を持つ、とてもハンサムな子猫でした。家族は「もう家の猫だよね!」と歓迎し、そのまま我が家の一員になりました。

考えてみると、この猫「みー子」は3回捨てられた猫だったのです。円海山で1回、団地で1回、幼稚園で1回…合計3回も捨てられた猫でした。でも、我が家に来るべくして来た、まさに運命の猫だったのです。

みー子は、家族の中心的存在となりました。家族と一緒にいることが好きでリビングに皆が集まると誰かの膝に行くほどの甘えん坊。思春期の息子たちの良き相手でもあり、みー子に関わると家族皆が笑顔になりました。



人の気配を感じるとすぐに家に戻ってくる臆病者でした。家族はみー子の好物をあげすぎて体重はなんと7.5kgのジャンボ猫になりました。孫たちが来て乱暴に扱われても決して爪を立てたりはしない猫でした。カーテンボックスの上で寝たり、蟬取りが上手だったり、帰宅するとドア越しに待っていてくれて抱き上げて頬ずりしてから夕食の支度を始める…。そんな日々が20年と6か月続きました（今は鎌倉霊園で眠っています）。



命の大切さを動物と幼児を通して考えさせられた記事を見つけました（原文そのまま）。

幼稚園に通う二人の女の子が川で遊んでいる時に、段ボール箱が流れてきたのに気が付きました。岸に上げて中を見てみると小さな仔犬が入っていました。二人がその仔犬を箱から出してあげるとその仔犬は同じところをクルクルと回ってばかりでどうしても放っておくことができませんでした。二人は大人に内緒で仔犬を団地の駐輪場で飼うことにしました。その後、何日かがんばって世話をするのですが幼稚園児の二人では限界があります。繋いでいた紐がクビに絡まって苦しそうにしている仔犬を見た二人はこのままでは仔犬が死んでしまうと思って管理人のおじさんに相談します。おじさんはなんとかしてあげたくて団地の人達に集まってもらうと「この仔犬は目が見えないので、捨てたらすぐに死んでしまう。子ども達と一緒に責任をもって飼うので、団地の隅に小屋を建てて、飼わせてほしい」と訴えました。しかし集まった人達は「規則は規則だから」といってなかなか認めようとしくれません。管理人のおじさんも無理だと思って諦めかけた時、女の子達が立ち上がって「どうして、たすけちゃいけないの？盲導犬は目の見えない人を助けてくれるでしょ…それなのに、人がどうして目の見えない犬をたすけちゃいけないの…」と泣きながら叫びました。この質問に答えられる人は誰もいませんでした。そして、今まで反対していた一人が「わかりました」と言うと、集まった人から賛成の拍手がパラパラと起き始めてやがて大きな拍手になりました。

相田公弘（父上が書家の相田みつを氏といこ）フェイスブックから ある団地での実話より

